

楽しい鹿児島、たのもしい明日

～ビジョンと実行力で鹿児島の再生を～

(ふるさとの暮らしで思うこと)

私は前回の選挙において多くの方々のご支援を頂いたにもかかわらず、私の至らなさから皆様の期待に沿えない結果となってしまったことを申し訳なく、率直に反省しています。心ならずも私の不適切な言葉から、皆様に私の真意が十分に伝わらなかったこともありました。また、不本意にも女性の皆様に不快な思いをさせたことも反省しています。皆様から頂いたいろいろなご指摘を謙虚に受け止め、改めるべきは改めたいと心に刻んでおります。

私は、前回の選挙以降ふるさとの出水に身を置いて、自らを語らず言い訳もせず、5人の孫の成長に目を細めながら、一県民としての日常を送って参りました。その中で、今まであまり気付かなかった光景もいろいろありました。坂道を杖をついて登っておられるご高齢の方を見ると、何かお手伝い出来ないかと思えます。子供たちが横断歩道を渡った後、運転者にお礼をする姿は感動的ですし、皆立派に育てて欲しいと思えます。生きづらいことの多い社会にもかかわらず懸命に努力を続けている障害をもつ人々に、行政がきめ細かい、そして弾力のある手を差し伸べて、たくさん笑顔がはじける社会になって欲しいとも思えます。

(県政への危機感)

世界の、そして日本の将来はますます不確実性を増してきており、国際社会が動揺する中で、年金・医療等を含む全世代型社会保障制度の再構築、

経済の安定的成長、地球環境問題、人口減少への対応、格差社会の是正、大規模災害対策等に的確に対応しながら、少なくとも今の生活レベルを守っていくことの難しさに改めて深い思いが生じてきました。

このような中で、現在の鹿児島県政は次世代のビジョンを的確に示せず、鹿児島が本来持つ活力を失いつつあるのではないかという危機感が徐々に大きくなってまいりました。

財政の健全性も揺らいできています。私が3期12年かけて451億円もの財源不足を解消し、当分は心配のない財政システムを作り上げて参りましたが、この4年間、財源の確保が必ずしも十分でないことに加えて、重点的に投資すべき分野に公的資金が回らず、効率的な財政運営がなされていないのではないかと懸念しています。

また、早急に決定し、実行すべき県政の重要課題が、一向に前に進んでいません。例えば、県立体育館の整備や、明治維新150年、オリンピック、国体と続くビッグイベントを鹿児島の発展に活かす取り組み、農業をはじめとする一次産業への重点投資、あるいは地域の特性を活かした県土の均衡ある発展への取り組みなどにおいて、残念ながら見るべき進展がありません。

加えて、県庁の組織としての能力が低下してきています。民間の力を活かし、市町村と連携し、鹿児島県の実力を高めていくためには、県庁が果たす役割は大きなものがありますが、今の県職員は委縮しその役割を果たせていないように見えます。

このような現状を目にするにつけ、「このままでは、私の3期12年の積み重ねが、水泡に帰してしまう。今立て直さなければ、鹿児島の将来に大

きな禍根を残してしまう」という強い思いが、ふつふつと湧いて参りました。

(新たな決意)

私は、先の就任期間12年の中で、厳しい行政改革に取り組みながらも、県民生活には影響が及ばないよう様々な工夫をするとともに、農林水産業や観光産業を将来の鹿児島県の経済を支える産業として明確に位置づけ、県民一体となって鹿児島県を築いていくことを目指してきました。

南北600km、東西200km という広大な県土の中で、多様性に満ちた自然、環境そして人々の生活様式を守りながら、大きく変化する内外の諸情勢の中で県全体の力を一つに結集して、県民一人ひとりの暮らしを守っていくことは決して容易なことではありません。

再び県民の皆様のご指導、ご協力を頂けますれば、「口に偽りを言わず、身に私を構えず」という故郷の教えを旨とし、県政を進めるにあたっては県政の主役である県民の皆様と手を携えながら、丁寧に、しかも拙速にわたらないように細心の注意を払って参りたいと思います。

そして、ビジョンと実行力をもって県政を立て直し、将来にわたって活気に満ち、全ての県民にとって安心してのびやかに生活できる「楽しい鹿児島、たのもしい明日」を築いていくために全身全霊を傾けて参りたいと考えております。

伊 藤 祐一郎